
過去と未来。

音無 無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

過去と未来。

【Nコード】

N0041U

【作者名】

音無 無音

【あらすじ】

突然、ある中学校のあるクラスにやって来た「来宮 梨凜^{このみや りりん}」。
彼女は今の時代、昭和にないものを持っていて・・・・・・。

【1】「まだまだ」

うちのクラスの転校生。

すぐに大きな噂になった。

「見たことのない箱を持っている」「聞いたことのない歌だった」

「箱と話してた」「不思議な機体を持っていた」

などと、いろいろな噂が立つ。

すべて現実だ。

そしてその噂の彼女の名前は「来宮^{このみや} 梨凜^{りりん}」。

名前も不思議な子だ。

普段は教室に一人でいる。

青い箱から黒い紐が伸びていた。隣を通ると何か聞こえる。

思い切って話しかけてみた。

「ね、ねえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

彼女は無視をしたのだろうか。読んでいた本をぱらりとめくる。

「ねーえー!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・、何？」

耳につけていた紐をとってくれた。

「それ、なあに？」

「iPod nano、最新機種」

何語か理解できなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・、それ、どーいうの？」

「音楽プレーヤー・・・・・・・・、デジタルオーディオプレーヤーか？」

それも何語か理解できなかった。

「で、何か用があるからよんだんだよね」

「え、あの、いや・・・・・・・・・・」

「ないの？あつそ」

黒い箱から音が流れて画面が綺麗に彩られる。

「ふう、クリア・・・」

「おめでとう」

意味も分らず言ってみる。

「はぁん？」と曖昧な返事を返された。

仲良くなるにはまだまだかかりそうです・・・。

【2】「不思議な板」（前書き）

ナレーション、変わります。

【2】「不思議な板」

次の日来宮さんは不思議な板を持ってきた。
小さい黒い板と、白い大きな板。

「それは何？」

「こっちがiPad」

と、白い板を指さす。

「これは、iPhone」

黒い板を指さす。

どっちにしる意味が分からなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

来宮さんは嫌気でも指したのか、息を吐いた。
ため息だ。

「昨日から何？友達作り？ほかでやってくれないかなあ？」

「は、はあ・・・・・・・・」

「伝わってない感じ？はつきり言うよ？迷惑」

ズバツと言われた。でもここでめげちゃダメだ。

「で、でも、来宮さんとお友達に・・・・・・・・」

「だったら努力でもすれば？“来宮さん”とか距離置いてない？」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」

もつともだ。

なんで気付かなかったんだろう。

で、でも、今更なんて呼べば・・・・・・・・。

「じ、じゃあ！梨凜ちゃん！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・俺、下の名前気に入ってないんだよね」

「お、俺!？」

「はあ？自由でいいじゃない」

（ジェネレーションギャップも程々にして欲しいよ、もう）

来宮梨凜は、心の中でそう、思った。

彼女がこの世界になぜいるのか。

それは、時空が歪んだせい。

不本意でここにいるのだ。

だから未来から、この学校へ通学している。

父が科学者であり、この学校へ強制的に通学させられているのだが。
そんな、SFっぽいストーリー。

信じてもらいたい。

【2】「不思議な板」（後書き）

信じてもらいたい。
小説内だし。

【3】「ひえう!？」

来宮さんは体育を見学する。
勉強はそこそこ。

よくわからない言葉を使う。

例えば

「どうしよう、今日かけられる!宿題終わってない!」

「なにそれ?やばくね?貸すよ」

“やばい”って言葉らしいけど、よくわからないなあ。

それに

服だって改造してた。

短いスカート、緩いネクタイ。

何がいいのかわからないけど、男子の気を引いているのは確か。

「は、早帰りだね、一緒に帰ろ!」

「別にいいけど」

「あ、あの、華凜ちゃん!」

「はあ?何?」

ひえー!怖い!でもこれでへこたれちゃあ・・・。

「か、髪の毛いつつもくるくるだよね!なんかカツ「悪い!」

うん、我ながらいいこと言えた!

「はああ?巫山戯てんの?」

「ひえう!?!」

「はん。これだから嫌なんだよ、昔って!昭和って!」

あーあ、と手を広げて本当に嫌な表現。

そしてポケットから黒い小さい板を出す。

「もしもし?お母さん?うん、そう、迎え来てよ」

板に喋り出す。

「うん、うん、わかったはあーい」

「??」

「じゃあね。」

「? ばいばい!」

私は思いっきりの笑顔で手を振った。

「ああ、そーだね。この“友達ごっこ”もバイバイ」

「!」

まさか、傷つけた!?

「あんだなんか、大っきらいだから」

【4】「やなのっ！」

イヤだイヤだイヤだイヤだイヤだ。

こんなところ、来たくない！！！！

と、思ってもいるのだろう。

ぼすぼすとクッションを乱暴に殴りつける。

「いっそのこと、あたしが死ねばいいんだ……!!」

ぽすん、最後の一発は弱々しかった。

次第にはぼろぼろと涙がこぼれ落ちている。

「つんで、おとーさんは、自分勝手かなあぁ……つんぐ」

脱力し、座り込む。

「たしには、あたしにはわかんないよ」

ぐしっ、と涙を拭う。

その頃の美智子。

「あーあ……もう、ダメ、かな」

こちらでも脱力中だった。

翌日。

梨凜は不機嫌なまま……いや、さらに不機嫌になって登校してきた。

「り、梨凜ちゃん！おはよう！」

• • • • •

シカト。

「めつ、めげないもんっ！」

梨凜は長い茶髪をふわりとなびかせて学校へ入った。

「まあ、美智子、つまない方がいいって
「いやだ！やなのっ！」

【4】「やなのっ!」(後書き)

ナレーション不安定だよね
ちよっと直すわ

【5】「あゝあ」

「ふうん」

そうだったのは梨凜。

美智子と喧嘩して一週間の今日。

彼女、一週間での初の一言だった。

「辞任か。この調子で総理もやめちまえいいんだよねえ」

”現代の”ニュースを読んでいた。

勿論、板……でなく。

iPad（最新型）でだ。

次第次第にクラスの奴らも興味を持ち始める。

「あ、あの……それなあに？」

「iPad」

「あ、あいばつど？」

「携帯端末危機、よ。あらご免知らないね」

クス、と不敵に笑む。

わざとらしい。

「あと数十年もすりゃ出るわよ。それまでに生きてりゃの話ね」

皮肉混じり。

そんな彼女も男子にはモテる様子。

週に何度か呼び出され、告白されるもお奇しくも振る。

彼女曰く

『古い人間は嫌いなもの』

だそうで。

さて。

彼女ら、の仲直りの件。

うまくいったかというところ。

「まあ、梨凜ちゃん？」

「何よ」

「これ残しちゃダメでしょー？」
「いったらしい。」

「っるさいわね。嫌いなものは嫌いなもの。」

「全くふざけないでよ。こんなバカみたいな飯食べてられないわ」
「ついついと汚いものでも触るような手つきで食べ物に著で触れる。」

「あゝあ、家に帰ってマクドナルドのフィレオフィッシュ食べた
い」

「??？」

それでも口に食べ物を運ぶ梨凜だった。

過去と未来を紡ぐもの。

「え、もうこの世界には来れない？」

歪みがひどくなりつつあるそうだ。あと居れて一週間弱。

「そんな、もう帰る支度しないとダメなの!？」

せつかく仲直りできたのに、と梨凜は落ち込む。その瞳からは小さな光る粒が溢れていた。

梨凜は知らぬまに走り始めていた。行き先は。

「美智子ッッ！」

「ど、どうしたの？梨凜ちゃん……………」

「行こう！あたしと一緒に！ね？」

「駄目だよ」

「!？」

驚くように梨凜は顔を上げる。

「君は未来の子だろう？“僕”なんか連れていけないよ」

「……………美智子？」

美智子の服をつかんでいた両手が透け始める。

「いやっ!？なに、これ!？」

「さあ、早く目を覚ますんだ。トーストの匂いがする」

「……………どうしたの？なんかあんたらしくないよ？」

美智子なら、トーストなんて知るはずがない。

「階下で両親が待っている。ああ、ハムエッグの匂いだ」

「……………?」

そのメニューに目を見張った。それは、梨凜の家の毎週月曜日のあさごはん。

つかんでいる両手を離し、トン、と軽く押した。

「目覚めて改心するといい。」

「みち……ここ？」

梨凜はドボンと沼にでもつかるように堕ちていった。

「りりーん！起きなさい！」

梨凜の母親の声だ。

「ん”、今起きる」

つきん、と頭が痛む。服も昨日のままだ。

（……昨日？）

そつえば記憶がない。

ガチャリとドアが開く。

「よかったわ、いつものに戻ったのね」

「??」

「梨凜、あなたね？携帯を取ろうとして学校の階段から落ちたの」
だから、頭が痛むのだ。

机の上の携帯に目をやる。どこも損傷はない。

「一週間ずうっと寝てるんですもの。心配したわ」

（一週間……）

“あちらの世界”にいたのもちょうど一週間。

「ね、ねえ！美智子、美智子は!？」

「美智子？誰？お友達？」

「………!」

梨凜は絶句した。何もかも、なかったこと、だったのだろうか？

「今日は学校行けるでしょう？」

という母の問いにただ頷いた。

整理しよう。 あちらの世界は、夢と考える。

じゃあ今度はこっちの世界でのあたし。

いじめっ子の大將であり、携帯等の端末機器が唯一の友達。
フツ、今思い返すと最低ね。

「……ちよつくら、あいつの陰謀に乗ってみますか。

「おはようございます！」と挨拶してくるいじめ仲間を無視する。
大丈夫、殴ってこない。あたしのほうが確実に強い。

苛められっ子に手を差しのべる。我ながらかつこ悪い。

「ごめんね」

そう言つて微笑む。 多分微笑んでる。

「……………」

いきなりは受けられないのが始末。 でもいい。 それでいい。
少しずつ、ちよつとだけ。

直していけばいい。

あの世界が嘘でも、あの子が体験したのは確かな事実。

その事実をつなげればいい。 ただそれだけ。

さあて。 お後が宜しいようで。

それでは皆様。

また、ご縁が御座いましたら。

過去と未来を紡ぐもの。(後書き)

本来の趣旨を忘れました。
でも後味いいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0041u/>

過去と未来。

2011年8月16日09時26分発行